清水道中金毛草鞋

四

呂遠
1,346
4

直一夫庫

門へ 弥 1640 巻 4

奥州山水の粧ひ、ことさらに東都より伊勢が紅の花はなつかしく京大阪見物の親しみより編集して稱めるは行末ながく今示す所の諸説と本号雙びなきまで編よく書肆の需めるこゝろなり是ゆえ此巻を著すに当て重量を專にして幸ひ山の国を探索し絵師の道をみちびき名所古跡を考証を加え清書乃刻を附の恩ふかきこゝろざしなり

文化癸酉初夏

十返舍一九戲著

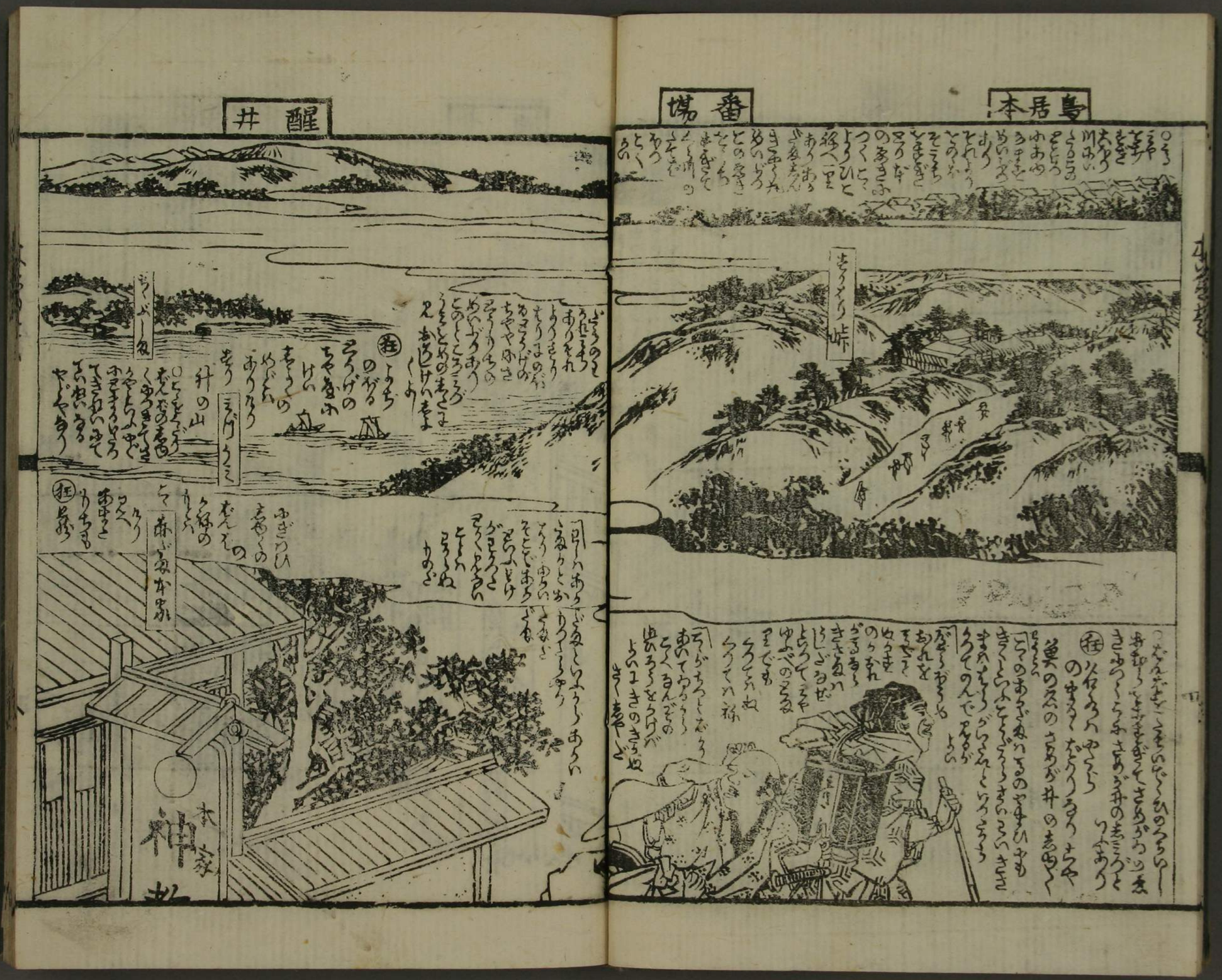
此街道を九て岐蘇かけ人あまたの東海道と北陸道の中間なるべし名を中山道と云ふ信州のうちなり本号多分しるす見聞の所の名路の花よりくるべきなり東海道の中山道と云ふ信州のうちなり

大津
草津
はそいた
東かいた

武佐
かち山
ぶみ書

越知川宿

高宮
高
根元
さし嶋品々
高宮屋


醒井
番場
鳥居本
柱
木家
神

自是東　美濃國
自是西　近江國

福屋

右

大槽
さくや

十三峠の茶屋
犬井

十曲峠

○大井の水きをちそぎそいるを
むゝそでよきちや
やまゝゝまぶ川ゝ田
ま中村なゝゝハすんぐら
あゝこすんでさうのあ
ぐゝふちゝゝうゑ水の
ちゝゝゝゆゑそこことさぎ
てゝゝゝろ川の者くゝ
佐くこのぐころいろく
ののぐゝしさ石ちろ
ふゝゝうゝのぐゝゝ

注 大こくのふくゝろの
中津川ゐれや
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝくのすんゝぐ
○それゝゝゝゝやざる
ゝのぐゝゝゝざろあい
とゝゝぐこてゝちゝ
ちのくゝゝくゝゝゝを
これゝゝくゝぐくゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
本を川のゝゝゝゝゝ
ちゝくゝちゝげきゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

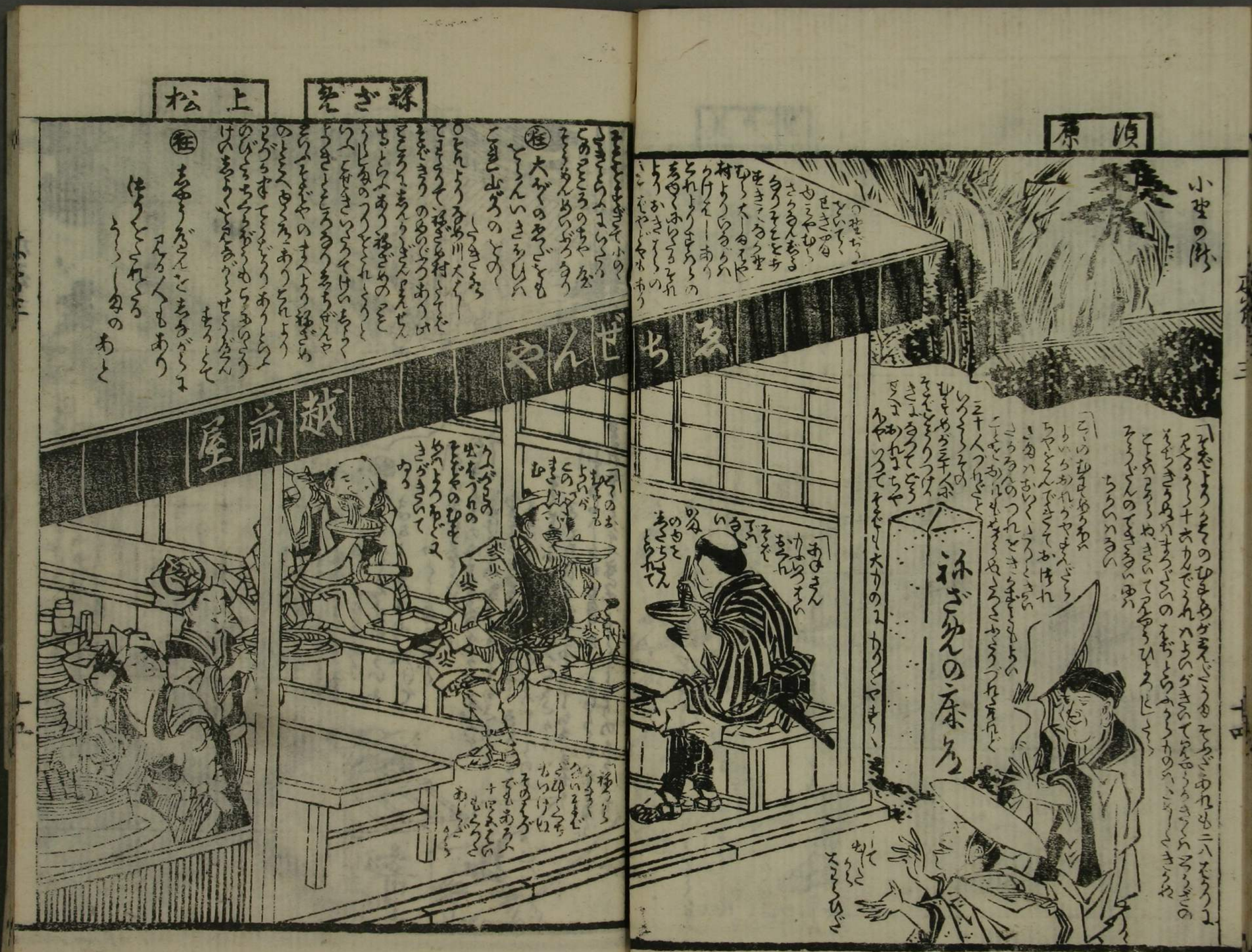
注 ゝんゐハかゝゝのふぐさ
あゝゝこゝゝゝゝ
だゝゝゝゝゝゝゝゝ

「おれハぢもむ
るふのゝこ
ぢがもこそ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ」

ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

美戸野

野尻


須原
小型の陣
ちえ
祢ざ免の床屋
越前屋
上松
祢ざ免

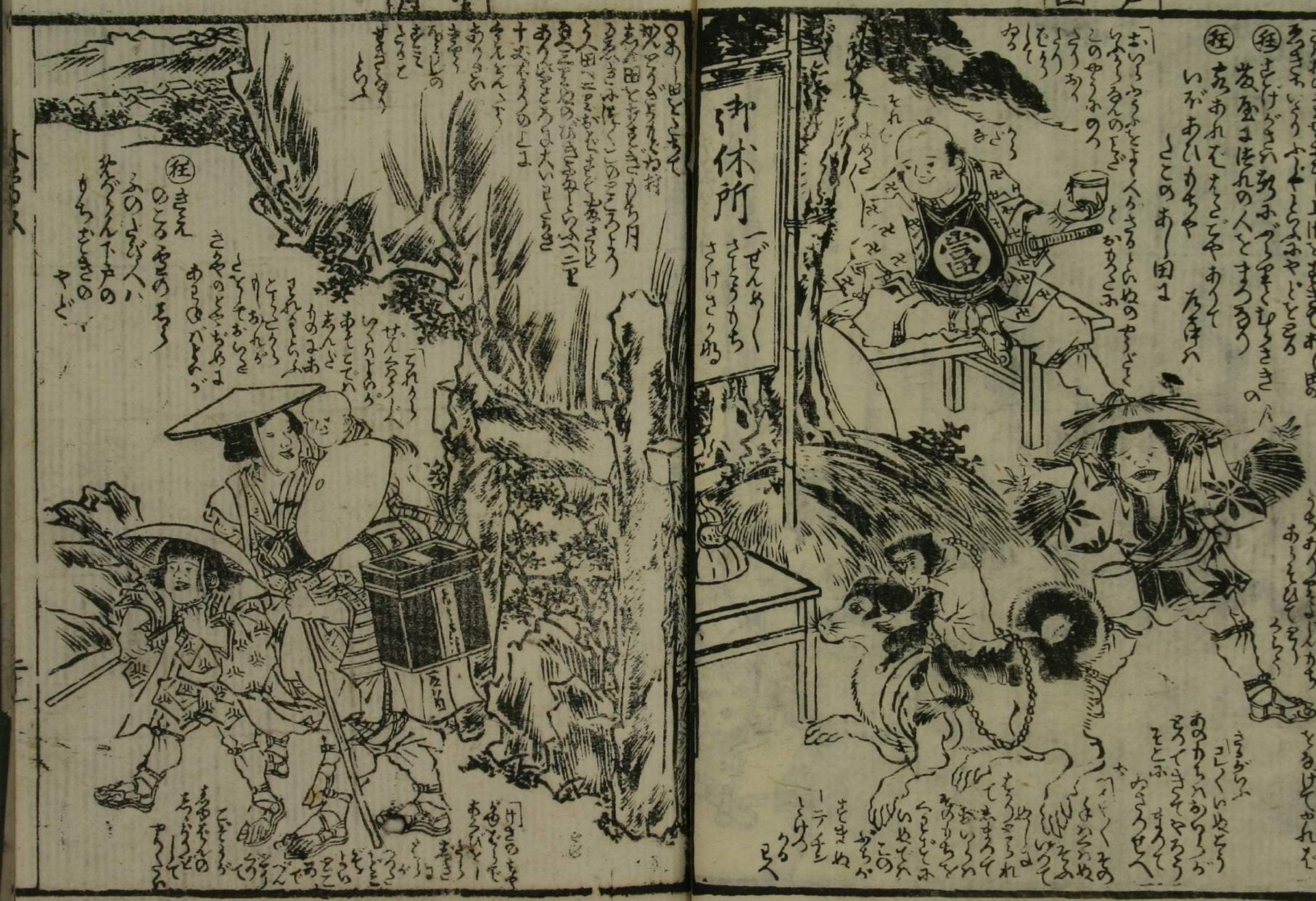
霊験諏訪御桙　十返舎一九作　全六冊近刊

川瓮
ひの本屋所

本山
洗馬

諏訪温泉之圖

和田峠
長久保


御休所
一ぜんめ
さけさかな

○りそぶるの　あるくとき　ちをぎてうそぶくこと
ちとしかぎや　さうまさぶ　ゆうりょ　ゆうとうこ世村
中あををぎて　八ろくの　あるく　おいくる　これとうい　ませむら
ちくま川のそ　とうとう　まわるどの　ふきよけく
狂　ゐまざうを　ふえて　ひさしく　ぶざうの　あるく
ひとりの　ちかるど

ものざつるや　ゆみ
かぎや　ゆみ
ぶんる　ぶつけまで
ちるるる　のしくる
さろしゆい　ちんわしうる
ちんのさうてさ　しろさこびやく
ちゆうくれさろ　ちゆのそのわら
ゆんこりんで　ぜゆいのうるの
りうることが　あびゆえふりひ
まるを
本そのうちいろ　きそひでも山ち
だつうつできそ　くちうろいその
うろうろ　きそ
わら
の
とびようう　ぜふぶらう
ふいできそ　そえトる
ちどうる　ゆくとびい
きのき　そのいは
ちゆんの　ゆうゆうむで
ちくしてさそ　ちるる

小田井
追分
沓掛

通

高崎
安中
板鼻

金賀野
新町
左右
二十七

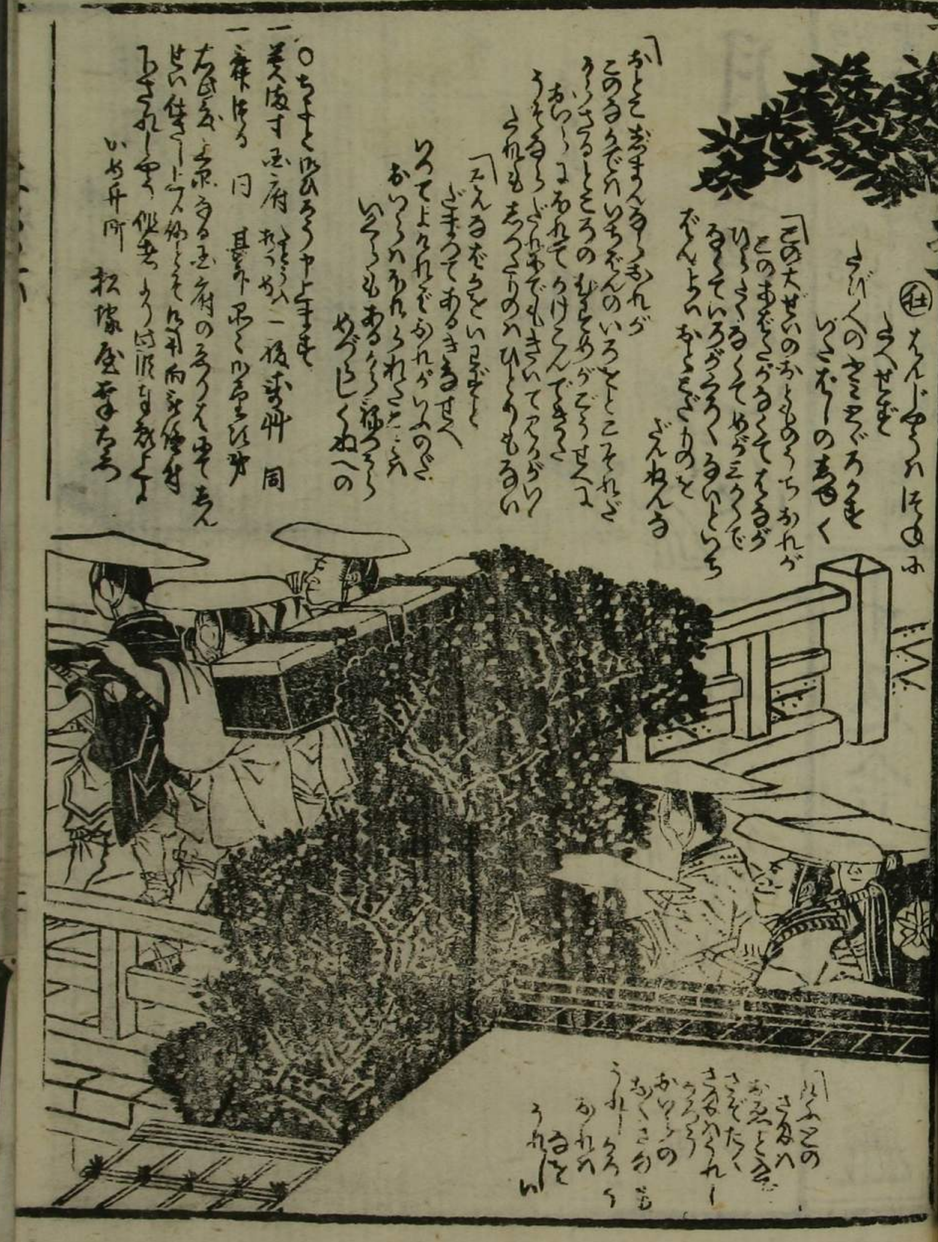
二八そば

味噌所

上尾

大宮
浦和

福
福
一さんめし
清酒看



妙義山霊験記 杉玉の月夜 全三冊 十返舎一九著 喜多川月麿画 近刻

十返舎一九著

○かくてそるげのびさちそくぶりのさいうハ
たろくのぞくちうこはくがろ　しらとそ
のたるくゆつきふりれ　をやうてこの　こう
のちやなふふちこうろ　ろこびのさけ　そこ
かりてこぶひふこのくのふるんとこどくこ
とまりうをやあくたろくきくせんとてまぐ
たぐくまこ中ろうけるこのつぎのこんさろゆ
たぐのきゆうろ昨たこのよこつきこらよの
くこくつまとこりてこれ　ついてうれば
こそかーるかくいきま　これかくそくさん
ともそたぐあつぎぐーようきそくふふ
びんせんして出けんホふろーようこそ社一の
たのうしここ出トるのあそひとたるしこれよろ
あ戸名ろうちくなほくを山へさんたいくそれ
ようあうたうゆいたくつのこやふいうろて
日出えの市少ちさんけのーまくふたくろい
たをきこくのこちまぐし　久ふくの和このの
ろけいとたころとるひきつくきぐこん
いこーやいゆくそはゆるはくすちるく

十返舎一九賦

夢ちのふかさ見る花の
はるすもる　梅の春　六十